

令和 6 年 5 月 24 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00785

研究課題名（和文）小学校英語識字難民化リスク回避のためのOGメソッド型マルチセンサリー指導法の開発

研究課題名（英文）Development of an OG Method-based Multisensory Instruction Approach to Avoid the Risk of English Literacy Difficulties in Elementary School Students

研究代表者

荒尾 浩子（Arao, Hiroko）

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：90378282

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：小学校英語で児童が「読むこと」「書くこと」を学ぶ際、各々の学習スタイルに対処した識字指導方法を開発する。英単語の文字に対処する際、学習者は自分の優位な感覚に依拠しながら、英単語の文字を学習するが、実際の英語授業では児童は自身の学習スタイルに合わない方法で英単語の識字指導をされることがあり、過度な認知的負担から、英語の読み書きに困難が生じている。その結果、英語への苦手意識を高め「小学校英語識字難民化」のおそれが出る。これを回避するため、異なる学習者の学習スタイルを尊重し、感覚優位性を念頭に、マルチセンサリー（多感覚）を意識した識字指導方法を開発する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究は、英語圏のディスレクシア研究から得られた知見を基に、日本語を母語とする英語学習者の識字指導法を開発することを目指した。特に、日本語と英語の正書法の違いによる読み書きの困難を分析し、日本語話者に見られるディスレクシアの種類を特定して、それらに対応する指導方法を探求した。多感覚を取り入れたOGメソッドと、イギリスディスレクシア協会が提案する学習スタイルを活用して、日本の英語教育での応用可能性を模索。デジタルデバイスとの融合を含む新しい書記指導法の提案は、教育現場に新たな視点をもたらした。

研究成果の概要（英文）：To develop a literacy instruction method tailored to each student's learning style when learning to 'read' and 'write' in elementary school English. When dealing with the letters of English words, learners rely on their dominant sensory modalities to learn the letters. However, in actual English lessons, children are sometimes taught literacy in ways that do not suit their learning styles, leading to difficulties in reading and writing English due to excessive cognitive load. As a result, this can increase their aversion to English, raising the risk of becoming 'elementary school English literacy refugees.' To avoid this, it is necessary to develop a literacy instruction method that respects the different learning styles of learners, keeps in mind sensory dominance, and incorporates multisensor approaches.

研究分野：英語教育

キーワード：英語識字教育 英単語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

英語圏では、ディスレクシア(dyslexia)の研究と指導法開発は、日本以上に注目度が高い。その理由として英語での発症率の高さが挙げられる。日本語では約2～5%だが、英語では3～18%と高くなると言われ、言語の性質により発症率が異なることがわかっている。日本語のように文字と音が1対1の対応になっている透明性が高い文字体系ではディスレクシア(dyslexia)は発症しづらく、英語のような文字と音が1対1の対応でない透明性が低い文字体系では発症しやすいことがわかっている。このことから、日本の小学校の国語授業において、これまで読み書きにさほど問題がなかった、もしくはディスレクシア(dyslexia)の症状が現れなかった児童が、英語で文字を読み書きすることになり、初めて文字の読み書きに困難を覚えることは十分ありえることである。中学校の英語授業で初めて読み書きが始まっていた頃は、英単語を読んだり、書いたりして躓く中学校1年生は多く、単に「アルファベットが読めない・書けない生徒」「英語の読み書きが苦手な生徒」「英語学習で努力が足りない生徒」という括りで認識されていた。そして指導者は、英単語を何度も聞かせ、言わせ、見せ、読ませ、書かせることを繰り返す、従来の識字指導法で、なんとか克服させようとしてきた。日本語では、難読症の症状が全くない正常な学習者の中には、程度に違いこそあれ、英語のディスレクシア(dyslexia)に類似した困難症状が出る者がいることを認識している英語指導者はまだ少ない。小学校英語で読み書きが不得意なことへの不理解によって児童が直面する困難な状況を「小学校英語識字難民化」と問題視し、そのリスクを回避する指導法を開発することが必須である。

2. 研究の目的

ディスレクシア(dyslexia)の指導法の一つにオートンギリンガム法(The Orton-Gillingham Method, 以下OGメソッド)という方法がある。この指導では、文字一つ一つの発音と綴りの関係性を学習者の多感覚に訴え、学習者の優位な感覚を活用させることで習得を導き、記憶を定着させる。特徴的な方法として、触覚・運動覚は文字を単なる視覚的な平面のプリントと捉えず、物体化して立体感があるものとして教材化したり、学習者の身体の動きで文字の形をとらえたり、音声化した時の口や唇、のどの動きを体感することで認識を深め、長期記憶に植え付けていくものがある。英語圏では元来、ディスレクシア(dyslexia)と診断名がつく学習者に特化した指導法であったが、単にアルファベット学習が苦手な子どもに対して、この指導法が功をなす実践例があり、英語圏の普通学級の指導でも注目を集めている。英語圏のディスレクシア(dyslexia)の指導方法であるOGメソッドは、日本で初めて英語で読み書きを始め様々な感覚優位性を持つ児童に効果を発揮することが期待される。日本の教育現場に適用できるよう、教育実践者の実践的知識と研究者の科学的根拠を統合した指導方法を開発していくことが目的である。

3. 研究の方法

(1) OGメソッドについて

OGメソッドの基盤となる理論・応用研究から開始する。OGメソッドに関する資料・学術図書を文献研究し、その基盤となる理論をレビューする。そしてOGメソッドを実践するための教師に対するトレーニングコースなどを通してメソッドの実践的スキルを習得する。加えてOGメソッドの実践研究とOGメソッドの教材、教具の研究をする。また英語圏でのOGメソッド教材を日本の英語教育に適用、実用化するための教材デザインをする。

(2) 多感覚アプローチについて

また多感覚(視覚、音声、触覚・運動覚)に関する日本の児童の優位性の研究をする。小学校英語における英語の「読み」「書き」の指導と学習での児童の多感覚の使用について観察、聞き取り調査研究を実施し、結果分析を行う。それを基に、日本の児童の多感覚の優位性を念頭にOGメソッド教材を応用した小学校英語教材を英語教科書に照合してデザインし、教材の利用、教具、指導法の開発を行う。デザインされたOGメソッド教材を応用した小学校英語教材の利用の指導手順や準備する教具など具体的に考案し、識字指導法のモデル開発をする。教育現場での使用のために教育現場での試用や教員への聞き取り調査によって、教材、教具、指導法の改善のための微調整を実施する。研究全体を通して明らかになったことを基に、開発した指導法の細かなマニュアルを作成し教育現場へ還元する。

4. 研究成果

(1) OGメソッドと応用方法に関して

英語圏でのディスレクシア研究に関する論文、専門書を多くから、文献研究を深めた。ディスレクシアには、多数の種類が存在し、その分類方法も多様であるが、分類方法を基に、日本語母語

とする英語学習者に当てはめることを思索した。英語特有の正書法のシステムが要因となって起きるディスレクシアがあるが、さらにそこに日本語特有の正書法のシステムとの違いによる困難が重なることで、英語による読み書きの困難は複雑化する。まずは日本語の正書法と文字タイプを明示し、英語との比較により生じている困難を分析した。それを基に日本語を母語とする英語学習者に見られる英語の読み書きに困難が生じるディスレクシアには多数の種類があるが、日本語母語話者の英語学習者の大半は、そのカテゴリーの中で、「マイルドディスレクシア」もしくは「ディスレクシア症状」に分類されると考察した。

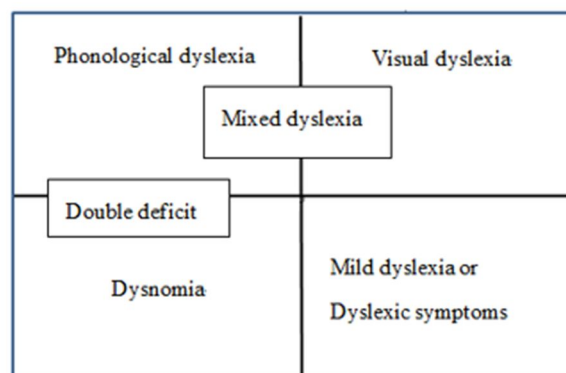


FIGURE 1 Figure Types of dyslexia
(original model based on the study of Wood, 2006)

これらの種類のディスレクシアへの指導方法を日本の英語教育で応用する可能性を探求した。指導方法の適切な選択には各学習者の学習スタイルの把握が重要となるため、学習スタイルの識別には、イギリスディスレクシア協会が提案し3つに大別される学習スタイルに依拠する妥当性を考察した。その学習スタイルを踏まえた上で、英語圏で活用されているOGアプローチが日本語を母語とする英語学習者に応用的に利用できる可能性を思索するためOGアプローチの理論や実践的な方法の論究を深めた。OGアプローチで最も重要である視覚、聴覚、運動感覚の3つを強化する指導方法の多くを調査した。英語圏ではディスレクシアの指導方法として一般の外国語学習で見落とされがちな運動感覚を刺激し学習を促進するための教材や教具が多く開発されており、日本での応用的活用のための示唆を得た。OGメソッドに関するこれまでの研究を基にシンセティックフォニックスの実践をニュージーランドのプライマリースクールの授業の視察と指導者らからの聞き取り調査を実施した。またそこで用いる市販の教材収集と指導者らのオリジナルの教材を研究した。小学校英語における英語の「読み」「書き」の指導と学習での児童の多感覚の使用について観察研究を行った。英語圏で実施されている指導方法は指導者がネイティブスピーカーであるということもあり、マニュアル通りの指導方法に固執しないが、多感覚の効果への意識は高く、短時間で複数の異なる指導方法を授業時間内に組み込むことが多いことがわかった。これらの発想を基に指導者の多感覚の優位性を念頭にOGメソッド教材を応用した小学校英語教材を英語教科書に照合し創案することに着手した。教育現場の調査から、書くことに関して、大半が、ノートの手書きを採用しつつ、デジタルデバイスによる入力を進めているという現状を確認した。これを踏まえた上で英語学習者の英単語の読み書きに関する学習スタイルを調査すると調査対象のうち16%が個人の学習の中で文字を見ることに加え指を使って書いてみるというスタイルを実施し効果を成していることがわかった。指を使った学習ストラテジーを導くOGメソッドで採用されているようなサンドトレイを使った単語学習などの活用を視野に入れた。しかし教育現場の観察や聞き取りから現状のICT化の中で通常の英語教育の現場に応用するのが難しい。デジタルデバイスデジタルデバイスと融合しつつ洗練された英語書記に意識を向けたスタイラスペンを活用することで手指の感覚に意識を向けた書記指導方法が提案された。スタイラスペンを使用した指導方法のポイントは「紙との摩擦」「筆圧」「筆運び」「振動」のレベルを調整し、初期学習者にどのように英語の文字を書くのかを意識づけることで、そのマニュアルを作成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Hiroko Arao&Maiko Kimura	4. 巻 6
2. 論文標題 Multisensory Approach to Teaching Reading and Writing for Young EFL Learners	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 GEN TEFL Journal	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Karen Lopez, Maiko Kimura, Hiroko Arao	4. 巻 37
2. 論文標題 A study of EFL vocabulary learning with online application Quizlet	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 KELT: Kobe English Language Teaching	6. 最初と最後の頁 3-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 Maiko Kimura&Hiroko Arao
2. 発表標題 How Online-Classes Affect Students Who Need Special Assistance
3. 学会等名 Asian TEFL（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiroko Arao & Maiko Kimura
2. 発表標題 Digital writing for early English learning
3. 学会等名 2022 ALAK International Conference & AILA East-Asia Forum（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Maiko Kimura&Hiroko Arao
2. 発表標題 New Vocabulary Learning Method Based on EIP(English for Individual Purposes) Approach
3. 学会等名 The 31st ETA-ROC International Symposium on English Teaching & Learning, English for Specific Purposes International Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Maiko Kimura&Hiroko Arao
2. 発表標題 A case study of the effects of online classes on Japanese learners of English
3. 学会等名 6th GEN TEFL international conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Maiko Kimura & Hiroko Arao
2. 発表標題 神戸英語教育学会
3. 学会等名 学習アドバイジングの可能性- 2ヶ月月間の実践報告
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiroko Arao, Maiko Kimura
2. 発表標題 Possibilities of the Use of Orton Gillingham Method for Japanese Young EFL Learners
3. 学会等名 The 25th PAAL International Online Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Maiko Kimura, Hiroko Arao
2. 発表標題 New Teaching Method for Vocabulary with ATI Theory
3. 学会等名 The 30th International Symposium on English Teaching and Book Exhibit 2021 PAC & The 23rd International Conference and Workshop on TEFL & Applied Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hiroko Arao, Maiko Kimura
2. 発表標題 Multisensory Approach to Teaching Reading and Writing to Young EFL Learners
3. 学会等名 5th GEN TEFL (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Maiko Kimura, Hiroko Arao
2. 発表標題 How Vocabulary Learned in Online Classes
3. 学会等名 5th GEN TEFL (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	木村 麻衣子 (Kimura Maiko) (30290414)	武庫川女子大学短期大学部・共通教育科・准教授 (44523)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------